

〔第15回〕

NCGG-R1 研究発表会

National Center for Geriatrics and Gerontology, Research Institute

歯周病病因論の新展開

上皮バリア破綻による慢性炎症の発症と
その制御の可能性

口腔疾患研究部

松下 健二 部長

2016年12月13日(火) 16時00分
第1研究棟2階大会議室

感染症は微生物の病原性と宿主の抵抗力の相互関係により成立する。特に、歯周病原細菌のような比較的病原性の低い細菌による、混合感染で発症する慢性炎症性疾患では、宿主側の防御能の低下あるいは異常といった要素をその病因として十分に考慮すべきである。

体表は皮膚や粘膜で覆われ、それらが病原微生物や外来抗原の物理的、科学的バリアを構成し、感染制御の最前線で機能する。このバリアが障害されると微生物や外来抗原の体内への侵入が容易になり、その結果炎症反応や免疫応答が惹起されて皮膚や粘膜に慢性炎症、場合によってはアレルギー性炎症が引き起こされる。歯周病の発症や進展の過程においても、このような上皮バリア機能の低下が関与している可能性がある。

本セミナーでは、この体表のバリア機能と歯周病原細菌の関連性、加齢によるバリア構成タンパク質の変化、さらには上皮バリア機能の制御による慢性炎症制御の可能性について述べる。

座長：杉本 昌隆